

# 荷風と寅さん、 そして京成生活文化圏

## 川本三郎

杉並区に育った人間にとって、東京の東を走る京成電車（社名は京成電鉄）は長く遠い存在だった。

はじめて意識して乗ったのは、一九六〇年代の後半、週刊誌の記者をしていた時、当時、大きな社会問題になっていた成田空港建設反対運動を取材しに成田に行った時だった。

前夜、上野から京成電車に乗り、成田まで行き、そこで一泊して、翌朝から現地取材する。反対運動に参加している農家に泊ったこともある。何度か京成電車に乗った。

当時、付き合っていた女友達が上野まで見送りに来てくれた。上野で食事をして別れる筈だったが名残りが惜しく、彼女も京成電車に乗った。成田まではさすが

に無理で、途中の青砥（京成本線と京成押上線の合流点）で降り、また居酒屋で飲み、そのあと、中川沿いを歩き、駅で別れた。

そんなことがあってから、京成電車が身近かになってきた。

その後、物書きになりたての頃、一九七〇年代の後半、ある雑誌の、東京の町の映画館を歩くという企画で、はじめて京成立石に降りた。

葛飾区の区役所がある、区の中の町だが、駅は高架ではなく、駅周辺は戦後のマーケットのようなにぎわいがある。のちにすっかり有名になる呑んべ横丁がある。少し歩くと中川が流れている。

当時、立石には映画館が三館あった。そのうちの金竜館という古い大きな映画館を取材した。ピンク映画を上映していた。館主に話を聞くと、昭和三十二年に新東宝の系列映画館として開館、宇津井健主演の『スパージヤイアンツ』を上映した時は超満員だったと話してくれたのが懐しかった。

立石はどこか懐しい町だった。駅は前述のように高架ではなく地上にある。踏切りがある。間口一間ほどの個人商店が立ち並ぶ。居酒屋が多い。すっかり、立

石が好きになった。

それからよく立石に行くようになった。ホッピーを知ったのは立石の居酒屋だった。こんなこともあった。北口のある居酒屋に開店早々に入った。コの字型のカウンターで飲みながら新聞を開くと、おかみさんがやめてくれという。なぜかはすぐに分かった。客が次々に入ってきてたちまち満席。新聞など読んでいたら邪魔になる。立石の居酒屋の人気を知った。漫画家のつげ義春は、戦後、子供時代を立石周辺で過していて、戦後の立石をこう回想している。

「立石は）まとまりがなくて）ちや）ちや）してしましたね。駅前辺りは、やっぱりみんな焼けてしまったんです。その焼けた後にすぐ、駅前から大通りにかけて二百メートルくらい、闇市ができ（た）」（つげ義春 漫画術）ワイズ出版、平成五年）

現在、下町随一の居酒屋の多い町、酒都として知られるようになった立石だが、その原型は、戦後の「闇市」にあったことが分かる。立石の町が、いまでもどこか懐しい町なのは、戦後の名残りを残しているためかもしれない。

もつとも、この立石駅周辺の商店街も、近く再開発されるといふ。駅も高架駅になる。にぎやかな商店街で知られる北区の十条も再開発される。二〇二〇年の東京オリンピックを控え、東京のなかにわずかに残っていた戦後が消えてゆく。戦後に育った人間としては寂しい。

立石の町を歩いていて、ある時、中川に架かる本奥戸橋の袂に、江戸時代に作られたという地藏尊と馬頭観音、道しるべがあり、その脇にある案内板に、永井荷風の日記『断腸亭日乗』の一文が引用されているのを知った。

昭和十七年六月四日、荷風がこのあたりを歩いた時のもの。

「雨中奥戸橋の眺望画の如し。橋際に地藏尊と道しるべの石あり」

荷風は戦前、すでに京成電車に乗り、立石で降り、町を歩いていた！

京成電車は実は永井荷風ゆかりの電車として、荷風好きにはよく知られている。

京成電車の下りが江戸川を渡って千葉県に入ります